

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	田中 隆史
論文担当者	主 査 木島 貴志
	副 査 越久 仁敬
	副 査 新村 健
学位論文名	Physical function and health-related quality of life in the
	convalescent phase in surgically treated patients with
	malignant pleural mesothelioma
	(悪性胸膜中皮腫術後患者の回復期における身体運動機能と健康 関連 QOL の関係)
(背景、目的) 肺がん患者では術後に呼吸機能や運動能が低下すると報告されているが、悪性胸膜中皮腫(MPM)患者の術後維持期における身体運動機能と健康関連 QOL(HRQOL)の関係については詳細に検討されていない。本研究は、胸膜切除/肺剥皮術(P/D)を受けたMPM患者の術後維持期における身体運動機能とHRQOLを評価し、その関係を検討することを目的とした。 (方法) 2014年9月から2016年8月に当院呼吸器外科でP/Dを受けた男性MPM患者16名を対象とした。運動機能は握力、膝伸展筋力、6分間歩行距離(6MWD)、呼吸機能は努力性肺活量(FVC)、1秒量(FEV1)、HRQOLはShort Form Health Survey(SF-36)を用いて評価した。評価は、術前、術後退院時、術後1年目に行った。統計学的分析は各評価値の平均の差は反復測定による分散分析を、各評価値の変化量の関係はピアソンの相関係数を用いて検討した。対象者には研究について十分に説明した上で書面にて同意を得た。 (結果) 術後1年間で、6MWD、FVC、FEV1の値は術後退院時に比べ有意に改善した(いずれも$P<0.05$)。さらに、SF-36の8つの項目のうち、身体機能、体の痛み、全体的健康感、活力、社会生活機能、心の健康の6項目の値が、術後1年で術後退院時より有意に改善した(すべて$P<0.05$)。また、6MWD、FVC、FEV1は活力、心の健康、身体的機能と関連していた(いずれも$P<0.05$)。 (結語) P/Dを実施したMPM患者は、維持期において術後退院時と比較して身体機能およびHRQOLの改善が認められた。リハビリテーション専門職および他の医療スタッフはこれらの知見に留意すべきであり、今回の結果はMPM患者の回復期および維持期において、疾患に特化したリハビリテーションプログラム開発の一助となる可能性がある。 本研究の成果はP/D術後MPM患者に対するより有効なリハビリテーションプログラム開発の可能性を示すものであり、学位授与に値するものと判断した。	